

婦人科専門医に聞く

婦人科医師 **うちやま かなえ**
内山 華苗



ホルモン治療



ホルモン（生体内情報物質）は、古代ギリシャ語で「刺激する」とか「興奮させる」という意味を持つ言葉（*ορμων*、ホルマオ）が語源といわれ、現在 100 種類以上が見つかっています。全身の至る所で作られ、体がスムーズに働くよう、それぞれ異なる働きをしています。体内のホルモン量は一定に保たれるように巧妙に調節されていて（恒常性の維持・ホメオスターシスとよびます）、その異常は、皮膚・体毛・骨・栄養・体のイオンバランス・血糖・血圧・脈拍・免疫・成長・生殖など、いろいろな機能に影響します。足りないときは補う必要がありますが、ごくわず

かな量（50mプールにひとさじほど）で作用し、多すぎると害となります。また、腫瘍の中にはホルモンの影響を受けるものがあります。産婦人科で扱うのは、主に生殖に関わる領域です。

- ①月経不順：ホルモンバランスの乱れといっても様々で、卵巣をはじめ、脳の視床下部や下垂体、甲状腺や副腎、肥満が影響していることもあり、その病態に応じて対応する必要があります。
- ②子宮内膜症・子宮腺筋症・子宮筋腫：月経痛や過多月経の原因になりますが、ホルモン製剤やホルモン拮抗薬による治療をすることがあります。
- ③月経前緊張症や気分不快症候群：低容量エストロゲン・プロゲスチン配合薬（経口避妊薬）に、性周期と関連した気分の変調・乳房痛などの症状を軽減する効果があります。
- ④更年期症状や、閉経後の骨粗鬆症、外陰の違和感など

月経時期の調節や緊急避妊にもホルモン剤が使われています。経口避妊薬には排卵を抑制するほか、副作用として、月経痛改善・出血量減少がみられ、子宮内膜症の進展予防としても使われます。使用時は、血管内に血液の塊ができる血栓症などの副作用に注意が必要です。

このように、ホルモン療法は、女性の健康の維持・向上にも一役買っています。以前より乳癌や子宮体癌の発生が心配されていましたが、これまでの研究・調査の結果、有用性も評価されてきており、治療を受けるかたにあった薬の使い方を選ぶことで、効果をあげ、リスクを減らすための検証が続けられています。

月経や閉経に関する症状の中には、甲状腺や下垂体の疾患のほか、時にはうつ病等が隠れていることもあります。よくわからないけど困っている時にも、当院では女性外来を開設していますので、相談してみてください。



発行：独立行政法人労働者健康安全機構富山ろうさい病院 地域医療連携室

富山ろうさい病院だよりは、当院ホームページにも掲載しています。

【連絡先】0765(22)1280(病院代表)

E-mail: chiki2@toyamah.johas.go.jp